第 87 回麻布獣医学会　一般演題 5

イヌの皮膚原発骨外性粘液型軟骨肉腫の 1 例

髙安　浩平[1]，安野　恭平[2]，上家　潤一[1]，代田　欣二[2]，村井　　妙[3]

[1] 麻布大学獣医学部病理学研究室，[2] 麻布大学附置生物科学総合研究所，[3] キンダーケア動物病院

【背景】

骨外性粘液型軟骨肉腫（EMC）は稀な軟部組織腫瘍である。動物での報告例は少なく，最近イヌの初発例が報告された。今回，イヌの皮膚において病理組織学的ならびに免疫組織化学的，電子顕微鏡学的検索から EMC と診断した症例に遭遇したので報告する。

【症例】

イヌ，雑種，雄，8 歳齢。右後肢大腿部皮下の硬固感のある球形の腫瘤（25 × 25 × 15 mm）を切除。増大傾向や底部固着は認めず，付属リンパ節の腫脹もみられなかった。

【病理学的所見】

割面は白色で一部に透明感があり，周囲との境界は不明瞭。組織学的に，腫瘍組織は真皮～皮下織にかけて存在し，線維性結合織で区画された多小葉性構造を有し，各小葉内では好酸性の細胞質を持ち多型性に富む腫瘍細胞が粘液状基質内に単細胞で遊離，腫瘍細胞同士が相互連結する短く不整な索状構造や小塊状など様々な配列を呈していた。核の異型性は強く，分裂像も確認された。間質の粘液状基質は PAS 反応陰性，アルシアンブルー陽性，ヒアルロニダーゼ抵抗性であった。軟骨形成は認められなかった。免疫染色では，腫瘍細胞は vimentin 及び S-100a，neuron specific enolase，synaptophysin に陽性を示し，cytokeratin（AE1/AE3, CAM5.2）及び α-SMA，Iba-1，GFAP，desmin，melan A，chromogranin A，PGP9.5 は陰性であった。粘液状基質はび漫性に I，II 型コラーゲンに陽性を示した。電子顕微鏡学的に腫瘍細胞は発達した中間径フィラメントと粗面小胞体を有していた。

【考察】

現在 EMC は限局性に多方向に分化可能な未分化間葉系腫瘍と考えられているが，本例では腫瘍細胞の免疫組織学的特性により軟骨細胞及び神経内分泌細胞への分化が示唆された。イヌの初発例では肺原発で全身性に転移しているが，本例は現在までに術後 11 か月になるが，経過は良好である。